

何故、桐壺更衣は亡くならねばならなかったのか

国文学科一年 小山香織

一
源氏物語の主人公は、いうまでもなく光源氏である。ところが、源氏物語の首巻「桐壺」では、主人公ではなく主人公の両親たる桐壺帝と桐壺更衣の悲恋の描写に巻の大半が費やされている。この帝と更衣の恋物語の核をなしているのは、更衣の早すぎる死であろう。これより、桐壺の巻中にある疑問として「何故作者は主人公の一代記を語り出す前にその母親の死を描かなければならなかったのか」という問いについて考えてみたいと思う。

源氏物語は同時代の物語文学に比べ伝奇的傾向が非常に少なく、写実性の強い作品であるとの評価を一般的に得ている。それゆえもし作者が物語の構想上の必然性から主人公の母を死なせることを欲したのだとしても、その死は、作中世界においても合理的な必然性を持つ出来事として語られるはずである。だから、「何故作者は主人公の母を殺さねばならなかったのか」という問いの前に、「何故作中世界において主人公の母は亡くならねばならなかったのか」という問いについても考えてみたいと思う。

二
最初に、何故作中世界において更衣は亡くなったのかを考えてみたい。

まず、更衣が亡くなった直接の原因としては、主人公若宮が三つになった年のこととして、

その年の夏、御息所、はかなきごちちにわづらひて、まかでなむとしたまふを、暇さらに許させたまはず。年ごろ、常のあつしさになりたまへれば、御目なれて、なほしばしこころみよとのみのたまはするに、日々におもりたまひて、ただ五六日のほどに、いと弱うなれば、母君泣く泣く奏して、まかでさせたて

まつりたまふ。(1)

とあり、「常のあつしさ」、つまりもともと病弱だったのが、あの年の夏、ふとしたことから病状を悪化させ亡くなったのだということがわかる。夏と季節が限定されているのも更衣の死の現実性を増すひとつの要素だろう。盆地である京都の夏は蒸し暑く、病人である更衣には耐え難かっただろうと思われるからである。

ここで注意したいのは、更衣は退出しようとしたのに帝が「暇さらに許させたまは」なかったため、更衣の病状は悪化したと書いていることである。「御目なれて」と擁護してはあるが、帝の非が地の文でははっきり認められているのである。

また更衣が病弱だったのは生まれつきではなく、「人の心をのみ動かし、恨みを負ふ積りにやなりけむ、いとあつしくなりゆき」、「なかなかなるもの思ひをぞしたまふ」などと地の文にもあるように、帝の常軌を逸するまでの寵愛ゆえ他の妃たちに恨まれ、苛められてその心労が積み重なった結果だった。

これについて更衣の母君は、

身に余るまでの御心ざしの、よろづにかたじけなきに、人げなき恥を隠しつ、まじらひたまふめりつるを、人の嫉み深くつもあり、やすからぬこと多くなり添ひはべりつるに、横様なるやうにて、つひにかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなむかしこき御心ざしを思ふたまへられはべる。

と、更衣が横死したのはやはり帝の偏愛が原因だったといっている。

ここで安藤重和氏は、帝の「心情」と「行動」が「御志」と「御もてなし」という二つのことばによって切り離されて表現されているということを指摘され、「作者も祖母君も帝の「御もてなし」を批判していることになる。(だがその事は帝の「御志」そのものを批判する事では決してない)」といわれた。そして地の文に、

あまたの御かたがたを過ぎさせたまひて、ひまなき御前わたり
に、人の御心をつくしたまふも、げにことわりと見えたり。
などあることから、「更衣を迫害する女御・更衣達に作者が本
質的な非を求めているわけではない事が知られよう(2)」とされ
ている。

これらのことより、更衣のその早すぎる死の原因は何よりもまず、
帝の「御もてなし」、つまり更衣のみに心奪われて他の妃たちをか
えりみない行動、態度にあったといえる。

それに対して更衣自身は、たとえば殿上人たちが心配したように
唐代の楊貴妃のごとく帝の寵をかさにきて、権勢をほしいままにす
るといったような非は全くなかったと考えられる。彼女の愛は、
「かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにして」とあくまで受
動的なものであったのだ。

もちろん彼女は帝を愛してはいただろう。けれども帝の寵愛ぶり
を語る文に対して更衣の帝に対する思いを語った文は少ない。帝と
更衣の別離の場面以外では、先に挙げた「かたじけなき……」とほ
とんど同じ内容の「かしこき御蔭をば頼み聞えながら」という一
節が見えるだけである。これより更衣の愛は、帝のそれほど激しい
ものではなくあくまで帝の愛が先にあつてそれに応えるかたちのも
のではなかったかと私は思う。

ほかに桐壺の巻の冒頭では、更衣が「もの心細げに里がち」であ
ったことが語られている。また先にも引用したように、彼女は亡く
なる前の病状がそれほど進行していないときから里邸に退出しよ
うとしていた。これらのことから、彼女の愛は主體的なものではな
く受動的なものであったことが感じられる。更衣が帝が彼女を愛す
るほどに帝を愛していたならば、どんなに辛いことがあっても帝の
そばを離れたくないと思うのではないかと考えられるからだ。帝だ
けを頼りにしていたといってもそれは宮中でのことであり、彼女が

最後に頼りにしたのは里の母君だったのでなかろうか。このよう
に考えてくると、帝と更衣との恋は、帝が一方的に自分の立場を弁
えずに燃え上がったかたちの恋だったともいえる。そしてそのこと
が更衣の死を招いたのである。更衣の死は彼女自らの責任ではな
かったのだ。

このように、更衣には非はなかったということを作中世界におい
ても遅ればせながら理解した人々がいた。それが「ものの心知りた
まふ人」「もの思ひ知りたまふ」と表現される後宮の他の妃たちで
ある。彼女たちは更衣の生前は嫉妬に目が眩み、更衣ばかりを悪者
にしていたが、更衣の死後、更衣が彼女の身分に不釣り合いな寵愛
をうけた原因は彼女にではなく、他の妃を思いやることのできな
かった帝にあるということに気づき、更衣を偲ぶのであった。またつ
け加えていえば、この「ものの心知りたまふ人」「もの思ひ知りた
まふ」ということは、読者を物語に引き込むための作者の一種の
テクニクだと私は思う。桐壺の巻をここまで読みすすめてきた読
者は、普通なら苛められる更衣に同情し、他の妃たちに非難がまし
い思いを抱いているだろう。そこに「ものの心知りたまふ人」とし
て妃たちの一部が紹介される。すると読者は「この人たちは自分と
同じ考え方をしているな」と彼女たちに、ひいては物語に親近感を
覚えることができ、かつ「この人たちと同じ考えを持つ自分も『も
のの心知』る人であるのだな」と、満足感をも覚えるのではないだ
ろうか。作者はそのことを計算したうえでこう書いているのではな
いかと思った(3)。

さて、このように更衣の死は、帝の偏愛によって他の妃たちの嫉
妬がつもりつもった結果であるといえる。では、更衣の死を呼んだ
帝の異常なまでの執着はどこから生まれたのだろうか。

まず常識的に考えて、「様、容貌などのめでたかりしこと、心ば
せのなだらかにめやすく、憎みがたかりしこと」と後に回想されて

いるように、更衣が美しく、素直な人からであったことが帝の目に
とまったのだと思われる。そして寵愛を受けるようになった結果、
桐壺冒頭付近に、

人の心をのみ動かし、恨みを負ふ積りにやありけむ、いとあつ
しくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかずあ
はれるものと思はして、

とあるように、更衣のはかなげに消え入りそうな様子が余計に帝
の保護欲をそったのだと考えられる。更衣が帝の愛情だけを頼り
にしているいじらしさが帝の心に訴えた、というような記述があっ
てもよさそうところだが、実際には、更衣が心細げなのが帝の心
をつかんだ、というのである。

更衣がいたいたしいような様子をしていたのは、そう高い身分の
出身ではなく、しっかりした後見もないのに帝の寵愛をうけたこと
から他の妃たちの嫉妬を買ったためであり、また他の妃たちが彼女
を苛めることができるのは、彼女は後権を持ていないため報復す
ることができないのを知っているからである。もちろん彼女には帝
がついてはいるが、帝を支えるのが他の妃の親兄弟であるのだから
(4)、帝も更衣を苛める妃に対して思い切った手段をとれないの
であろう。このように更衣の出自の低さがかえって彼女が愛される
原因となり、彼女の死の原因となっていくのである。

このほかに、秋山虔氏は「(帝の更衣への偏愛は)藤原氏の左右
大臣家がしのぎを削る体制に釘付けられることへの拒否と表裏する
帝の姿勢だったかもしれない(5)」とされているが、ここでもま
た、更衣が左右大臣家につらなる家の出身ではなかったという彼女
の出自が彼女の愛される理由となっている。

まとめてみれば、更衣が愛されれば愛されるほど彼女に対する風
あたりは強くなり、それによってまた帝の更衣に対するいじらしさ
がつのり、と悪循環は続いていった。そして彼女の愛される原因も

憎まれる原因も、ともに彼女の身分の低さという改めようのない事
実にあったため、この悪循環を断ち切ることは不可能であり、更衣
はついに亡くなったのである。

三

こうして更衣は、彼女自身の責任ではなく帝の偏愛を原因として
亡くなった。では、作者は何故このような更衣、すなわち主人公光
源氏の母の死を物語冒頭において語ったのだろうか。

更衣の死は、まだ若宮と呼ばれている源氏がこれから育ってゆく
周囲の状況を設定するものであった。彼は、愛されすぎた母を持
った。これはそのままその忘れ形見である彼を父帝が限りなくいと
しむという状況をつくりだす。また彼は、周囲の嫉妬のゆえに亡く
なった母を持った。このことは、彼が生まれたときから危険な状況
のなかで生きていかねばならないことを意味する。そして自分の度
を過ぎた愛情の表現が更衣を辛くする原因となっていることに気が
つかなかった父帝も、更衣が亡くなったのちはさすがに若宮の将来
について慎重のうえにも慎重を期すようになる。ここに若宮が源氏
となる理由が生まれる。加えて若宮のまわりを取り囲む危険は、若
宮のこの世のものではないような優れた資質を現実性のあるものへ
と変化させる。何故なら、それほどの資質がなければ彼は生き延び
てはいけなかっただろうからである(6)。

このように母更衣の死は、父帝から鍾愛され、皇太子にふさわし
い資質を持ちながら臣籍に降らねばならなかった源氏、という主人
公の性格づけになくてはならないものだったのであったということ
がいえる。

またさきほどから更衣は帝が彼女を思うほどには帝のことを思っ
ていなかったのではないかとこのことを書いてはいるが、このことか
ら、更衣が帝との今生の別れの際に、

「限りとして別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけり

いとかく思うたまへましかば」と、息も絶えつつ、聞こえま
はしげなることはありげなれど、

と、いおうとしていえなかったことは、「もっとあなたを愛し
たかった(7)」というようなことばよりも、「若宮の立太子をよ
ろしく頼みます」という意味のことだったのではないかと思う。と
いうのは、更衣の母君が弘徽殿の女御の一の御子が立坊したとき
「慰むかたなくおぼし沈」んだとあることより、若宮が東宮になれ
ると思っていたらしいことが読み取れるので、母一人子一人でツ
カーであつたであろう更衣も母君と同じことを思っていたのではない
かと考えられるからである。

ところで、更衣が後宮に入ったのは、更衣の父大納言の「娘を宮
仕えさせよ」という遺言からであるが、この大納言と明石入道の父
大臣は兄弟であることが須磨の巻において明らかにされる。大臣と
大納言を並び立てた家は相当な名門であつたことが推測され、これ
は更衣の母君が、桐壺の巻で「いにしへの人のよしある」と評され
ていることから裏づけられるだろう。しかしこのかつての名門、
更衣の一族は今も零落している。これは現在権勢を誇っている左右
大臣家との政争に破れたからであろうということが察せられる。そ
してやはりその一族の血を引く明石の御方を妻として、没落した名
族の再興の悲願を受け継いだのが光源氏なのであるという(8)。

またこの設定には、源氏物語作者紫式部の、自身も四代遡れば醍
醐帝につながる血筋であるという零落貴族としての誇りが作用して
いるだろう(9)。

このように更衣が、若宮が東宮となることを積極的に主張はしな
かったとしても心の奥で願っていたとすれば、彼女がもう少し生き
ながらいていた場合、帝はきっと若宮を皇太子の位置につけようと
しただろう。するとそこに訪れるのは「長恨歌」そのままの破局で
しかなかったのではないか。それを防ぐためにも作者は更衣を早く

死なせねばならなかったのではないかと思う。

また、帝の愛がいちばん激しいときに、その愛を一身にうけたま
ま更衣は亡くなった。そのことは去りゆく更衣の帝への愛の程度に
かわらず、彼らの恋を純愛として読者に印象づける。そして帝の
哀傷の念は、源氏物語の全体に流れる「もののあはれ」の情趣の発
端となる。源氏物語の冒頭に据えられた更衣の死は、物語の奏でる
調べを方向づけるものともなっているのである。

そして何より更衣の死は、藤壺の宮の入内の間接的な原因となっ
たということによって物語の発展に大きな意味を持つことになる。
更衣によく似た面差しをもった藤壺の宮は、更衣を亡くした帝の深
い哀しみを慰めるため、更衣の形代として後宮に召された。

同時に更衣の死は、池田勉氏が指摘しておられるように、のちに
若紫の巻で「いふかひなきほどの齡にて、むつまじかるべき人にも
立ちおくれはべりにければ、あやしく浮きたるやうにて、年月をこ
そ重ねはべれ」と源氏自身の台詞に回想されているような深い喪失
感を幼い源氏に与えた。そして池田氏は、この源氏の喪失感が母に
似た宮を慕う少年源氏の清純な心情を生み出す必然性となったとい
われる(10)。源氏の藤壺の宮への思慕の情は、少なくとも初めの
うちは母がないという喪失感を埋めんとする代償であつた可能性が
大きいのである。

それから先ほどの若紫の巻の源氏の台詞は、「同じさまにものし
たまふなるを、たぐひになさせたまへ」と続き、自分と同じように
母を亡くしているということを聞いていよいよ他人事ではない気が
するので是非紫の上を引き取らせて欲しい、と紫の上の祖母尼君に
頼みこむものである。また源氏が最初に紫の上に興味を持ったのは
彼女に藤壺の宮の面影をみたからであるので、源氏と紫の上との出
会いは二重の意味で更衣の死が影響を与えていることになる。

このように、藤壺の宮と紫の上という源氏物語における重要な登

場人物である二人の女性と源氏との出会いに必然性を与えるものと
しても、更衣の死は少なからぬはたらきをしている。

最後に、安藤重和氏が、薄雲の巻で「源氏と藤壺の密通の結果出
生した冷泉帝が、その問題的な出生事情の故に罪を生来的に得てし
まい、その結果、天の咎を受けている」という事件が描かれている
ことを手がかりに、帝が自らの愛を抑制することができなかったた
めに更衣を死に追いやったという事実が、源氏の生来的な罪となっ
て源氏の複雑な生を運命づけるものとなったという説を示されてい
ることを述べておきたい(11)。

こうして、源氏物語の冒頭で語られる更衣の死は、さまざまなか
たちでのちの物語の展開に影響を与えているのである。

四

源氏物語の冒頭において主人公の母更衣の死が語られるのは、彼
女の死が物語の後の展開に大きな影響を与えるから、あるいは作者
がそのように物語を構成したからであった。では何故、作者はこの
ようなある女性の死という題材から物語を書き起こしたのかという
問題を、最後に考えてみたいと思う。

池田勉氏は、更衣の死による帝と源氏の喪失感は、作者紫式部自
身の喪失感に裏付けられたものであるとされている。池田氏は、風
巻景次郎氏が式部の家集に母を詠じた歌が一首も見えないことなど
を理由に「紫式部は母親にはやく死に別れたらしい」と推測されて
いることを示され、作者のその意識体験が桐壺の巻、ひいては源氏
物語全体に織りこめられているのであろうといわれた(12)。

また、紫式部は母に続いて姉を失い、姉の死後、家集に「姉なり
し人亡くなり、又人の弟失ひたる、互みに生き合ひて亡き代りに思
ひ交さんと云ひけり。文の上に姉君と書き、中の君と書き通はしけ
る」とある、姉と慕った友人をも失い(13)、さらには夫宣
孝をも失う。三谷邦明氏は、この宣孝の死が式部に「死」を凝視す

る態度を生じさせる契機となり、源氏物語の起筆につながったとさ
れている。三谷氏はさらに、源氏物語は桐壺の巻から書き起こされ
たとされ、桐壺の巻における更衣の死と帝の悲愁は、作者の夫の死
に対する深い悲しみの表出であるといわれる。桐壺の巻で更衣の死
と帝の悲愁を描くことは、作者の内的欲求であつたとされているの
である(14)。

このように、両氏の論によれば、身近な人をつぎつぎに失った作
者の意識体験が源氏物語の冒頭で「ある人の死とそれを悼む人」に
ついて語られる原因となったということがいえるよう。

さてここで、何故そのふたりは帝とその妃でなければならなかつ
たのか、という新しい問いが考えられる。この問いの答えとしては
作者が先行文学である『長恨歌』と『竹取物語』からアイデアを借
りてきているのではないか、ということがいえるだろう。長恨歌に
ついては桐壺の巻に「明け暮れ御覧する長恨歌の御絵」とはつきり
その書名が記されているほか、その引用が多く見られることより、
古くから桐壺の巻との関わりが指摘されてきている。竹取物語につ
いては、竹取物語と桐壺の巻の共通点のうちもっとも本質的なもの
として、女が男を地上にとりのこして他界へと飛翔していく物語で
あるということが挙げられるほかいくつか細かい符合があり、桐壺
の巻の執筆時、作者の念頭に竹取物語があつたことが察せられる
(15)。

このとき、何故長恨歌ははつきりそれとわかるかたちで引用され
ているのか、ということも少し考えてみたい。

桐壺帝と桐壺更衣の物語が長恨歌に似ているということは、当時
の知識階級には必ずわかることであつた。だからこそ作者は、長恨
歌からアイデアを借りているということを隠そうとはせず、むしろ
前面に押し出したのではないか。そして作品中で「世人」どころか
桐壺帝本人にまでも、ふたりの恋を玄宗と楊貴妃の恋になぞらえさ

せることによって、物語の現実性を増したのではないかと思う。というのは、源氏物語における作者の姿勢は、池田勉氏のことばを借りれば、「材料の事実性に拠って、物語の構想に真実性をよそおわせようと試み(16)」るものであるが、この場合、実際の宮廷社会で常識となっていた長恨歌を、作中の宮廷社会でも常識となっているものように描くことによって、作中世界に「まことらしさ」を付与する事実性を持ったひとつの小道具として、長恨歌を用いているのではないかと思うのである。

五

源氏物語とは非常に奥の深い作品であり、その主題が何かということを見極めるのはとても困難なことであると思う。源氏物語とは因果応報を描いた物語であるともいえるかもしれないし、理想の愛のかたちを模索する物語ともいえるかもしれない。また主人公による王権制覇の物語であるともいえるのかもしれないが、そのいずれにしても、物語の冒頭で語られる「桐壺更衣の死」が、その主題に微妙に響いているように思う。

これは源氏物語が、そのはじめから精緻な構想をもってつくられた物語であることをあらわしているのにはかならないのではないかと思う。源氏物語について知れば知るほどその奥の深さに驚かされるばかりであると思った。

(1) 石田穰一・清水好子校注、新潮日本古典集成『源氏物語一』S 51による。以下、本文引用はすべてこの本より。

(2) 「様あしき御もてなし——源氏物語の始発状況をめぐって」名古屋大学国語国文学 S 49・12

(3) 上野辰義氏の「讀美の機能——源氏物語の「二重構造」」(国語国文S 55・12)には、「ものの心知」という認識能力は、「当時貴族が貴族として在るために要求された人格的

なもの」であり、そのような認識能力を持った人物による讀美は「対象者の危機(非難・不満・不利)を緩和し乗り越えようとする動きを見せる」とある。

(4) 深沢三千男氏の「前光源氏物語——桐壺」(国文学 S 62・11)に、「帝のリーダーシップ不足、外感不在の感から、桐壺帝の権力基盤の脆弱さの背後に、河海抄以来指摘されている准拠としての醍醐帝の生母が、卑官の血を引く所から、あるいは桐壺帝の生母を卑母とする設定が隠されているのではないかと推測した」とある。

(5) 「桐壺」『源氏物語の女性たち』小学館 S 62

(6) 鈴木日出男「光源氏前史」日本文学 S 48・10

(7) 田村厚子「源氏物語「桐壺更衣」ノート」城南国文2 S 55・12

(8) 村井利彦「桐壺の夢」『源氏物語の探究 一〇』風間書房 S 60

(9) 岡一男『源氏物語の基礎的研究』東京堂出版 S 41

(10) 「源氏物語「桐壺」の作品構造をめぐって」『日本文学研究資料叢書 源氏物語I』有精堂 S 56

(11) (2)と同じ。

(12) (10)と同じ。

(13) 与謝野晶子「紫式部新考」『日本文学研究資料叢書 源氏物語I』有精堂 S 56

(14) 「桐壺——源氏物語の方法的出发点として——」『源氏物語講座 第三巻 各巻と人物I』有精堂 S 46

(15) 古内宏樹「たゆたう原形質——「かぐや姫」と桐壺更衣」語文(日大) 77 H 2・6

(16) (10)と同じ。